

# 小田原史談

第46号

発行所 小田原史談会  
小田原市内3-22  
小田原文化館  
郷土文館

## 曾我氏の館跡

神 一保 栄

只今曾我氏の館跡は地元の人達迄が思い遣いを致しているのである。

現在誰も信じている一帯の地番は左之番地であるが私等少年の頃はまだ敷地も土置も所々に残っていたとして物見塚があった場所には大きな石が沢山積み重ねて有ったのを只今の長谷川実様の祖父が只今の場所へ屋敷を新設する時(明治二十年代と思う)村人達を連れて物見塚の石全部を運んだ、その大なるは石垣に使用する様に割り石にしてそのまゝ運べる石はそのまゝ運び只今の如き石垣を積み上げたが石は相当量運んだと聞いている。其後其跡は畑に成っているが物見塚の場所は地下に横穴と成っている中へも入ることが出来るが古蹟と思われるので地

上は作物を作っても其穴は大切に残していられて古墳が正しいか歴史家の鑑定を求めたいと云うていられた。曾我谷津五七四、五七五、五七六、五七七、五七八の八番地に割ってあり高台である。それなら如何な場所が館が在ったかと云うと其隣地一米位の底地に平坦地が畑又は家が有る番地は曾我原五〇〇ノイロ四九ノイロ四九八、四九七ノイロ五〇一ノイロ五〇二、四九六、四九五ノ一二、曾我別所五二〇、等此場所こそ館跡と推定される。なぞかと云うと西に宮の台地を控へ殿沢川を引き土塚や土塁の跡後方北地は堀有り

曾我兄弟の幼少の時矢の根を磨いた矢の根井戸は館裏になる東方は一段高く、只今館跡と云うている地の外に堀の内と云う地名が残り百年前は池が有ったと父より聞いていた南は一段下との間に土塁が有っていた、土塁の下は東西平坦地で城地として有利に利用出来た事と察せられる。 国府津方面より小田原一面足柄平野は一望である。尚後方向山に生城と云う山城跡在、通うにも都合よき二条の小径を通してある。 現在に残念にも私の想像する館跡に牌にする石が子供

運んだ際刀が出たので今の家敷へ小社を造り御神体として御祠り致されてある。 鎌倉幕府時代豪士小沢氏があり幕底に仕えておりました。これが曾我の小沢氏ではないかと考えられます。資料がないので何とも云えないが小沢氏の墓など調べたらわかるかと思う。 徳川末期(天保頃)はあったらしく幕臣が大森家(小田原北条の前の城主)関係の旧記を調べています。 鎌倉時代小沢生を当地極沢の小沢氏とする説もありますが、これは河内氏の譜代であります、河内氏は有力な代官で巡遣されて来ていたものです。

曾我の小沢氏は曾我氏の譜代の様ですが、曾我氏は波多野氏より出自したものです。古くは小沢氏の庄園又は知行であったと思われるのです。同地方の古い開拓者の氏族の長であった。それが氏の上(氏神)であり後々に氏神と言われた。氏族の長は神官家として氏族の神を奉祀した、小沢氏はその一つの例である。

曾我の地は相模でも古く開けた土地であるから、小沢氏の開拓は千五百年も二千年も前に当るらしい。 尾崎一雄家が小沢神社の神主と成ったのはそう古い頃ではないらしいが、徳川末期には尾崎氏が神主となっていた。 小沢家は大森家に仕え、大森家が北条氏に亡ぼされた後は北条氏の家臣となり北条氏が徳川豊臣氏に亡ぼされ、小沢氏も徴職したと思われる。そして尾崎家は神主の株を保つたと思う他にそんな例があるので決定する。 尾崎家にも古文書があるらしく彼の作巻にもそんなことが出ている。 二宮町の小沢生のけんきゅう家の手紙より。

人皇七十一代後三条天皇御宇延久四壬子年(延久は六年に承保と改る)明治四十年にて八百四拾年に当る

## 小沢家と小沢大明神

内 田 武 雄

そもそも小沢大明神と申すは始め此の下曾我別所(此の所と其の名は曾我孝子養育の地にして曾我太郎祐信庚定める今の屋敷跡にあり)小善内と言う者なり延久四年壬子年三月有る夜夢に白髪の老翁来りて告て曰く吾は日の神の父なり汝に幸福を与えん、一祠を立て祭りをなすべし必ず疑う事なかれと、告て夢は覺たり枕辺を見れば果して一面の鏡あり、依りて善内は建立の思をなし彼の神鏡の裏を見れば是により、 媛蹈ライ五十鈴姫命の神靈鏡也故に善内は此の神鏡を吾家の宝となし我所有地同所字小沢へ祠を立て信心怠なしたもうに其功は日々新にして、諸人皇を聞伝えねがい、のぞみを祈り来たるによりて宮殿新築諸具の造業なつて、益々小沢大明神の御恵みによりて家の幸福家門繁榮となりたりと、 此の媛神の御母は三嶋瀧板耳命の御娘なり玉櫛姫命にして、大國主命の御子八重事代主命に御合つて生ます、御子即ち此媛蹈五十鈴姫命におわします。 狭野尊義の御名は神日本岩村彦尊の御名は神武天

### 小沢大明神の起り

皇と申し奉る即ち人皇第一の皇君にまします。此の大神に仕えまして御后となせ給う事日次の御子神ミナ川耳尊を生まれませす。此の誠の上なき御仕合せの御神也、次に此の善内と申すは先祖は位肖人にて家の系図は人皇の和代の皇子神八井耳命の御胤にして右に申す五十鈴媛命の御子孫なりしが故ありて当所に住居し身はまづしけれども時の主正真美儀の者なる故神の恵みに叶ひ幸福をえて此の神鏡に仕え神主と成りて官位も昇進して小沢大和守貞行と名乗り大福者となりて長く此所に榮統住居をになつて実になき行幸の家なり、此の小沢大明神を曾我総社と合社したもうは人皇百四代後相原天皇の御宇文龜三癸亥年十一月時の領主北条家にわ(文龜は四年めに永正と改る)同年甲子年故に北条早雲侯の命により此の下曾我別所の小沢大明神及び上曾我舞戸の八幡大神及び古城地の桓武天皇ともに曾我総社と別合祭をなして巴前の通り小田原城日之宮祭所と定められ社殿のこらず再建有つて当時諸神具、神門及び神輿

等迄修覆御寄附有之又神領先親の通り七十五貫文御寄附されし也又(棋社未社)棋社は伊勢阿宮及び出雲の大國主神、未社は紀伊の少名彦名神、松尾神又当家の祖先世々宗我宿禰靈神を祭る也、此時並諸祭具悉く成就す、右本社と合祭の内、小沢大明神と申奉るは右にも有る通別所字小沢之勸清有て其子孫長く奉仕しておりし処その前より当地方も乱国中にて、前後数年月戦争ひきつゞきそれがために当家も平民となるなれど兎に角当地の旧家なるをもつて、右小沢大神には総社(合祭はしたれども年度の大祭其他神事の節、別格出頭して参拝はもろろん四季の初穂物等献納致し来たりし次第なりとぞ、なお是より先きに鎌倉の管領上杉の命にて小田原古城主大森信濃守より同所宇齋戸山へ遷し祭りて、則小田原城日之少宮祭り仮と定めおかれしことなるとなり(此の年月不詳) 又小沢大明神を総社と合祭したる永正元年より、則本年(明治四十年)にて四百〇四年也 明治四拾四年三月

郷社宗我神社司 尾崎 茲正月初旬子に命ずるに、必其後を誌すべきをあいもつて予其稿を検るに辞句修正すべきものまゝありとかく、かくせば祖父の本領を損益になるの恐あり依て命のまゝ原稿の申し之を記し継ぎ耳附するに仮名を以てして表装を加へて同人に与えるのを資を成すことなり。 明治四十年年戌申年正月初 從六位 尾崎八束 啓

### 小田原における公共土木事業の大功労者

太田 康平

(1) はし書き 建設時代である。二―三年來不況となつたが、住宅の建設は依然として盛である。また道路の拡張、新設も全国至る所で行なわれてゐる。住宅の建設は国民生活の向上、文化発展のシンボルであり、道路の開発は先進國の間で社会、公共事業が甚だおきてゐると云われてゐるわが国において、最近自動車が発達によつて促進された公共建設であり恐らく、数年後には欧米先進國に劣らない程度に、全

右の川口氏及び前述の湯川氏の功績は、まゝまゝであるので、相当知られてゐるが、小沢氏の酒匂川堤防工事における偉業は、数十年に至る破壊復旧事業に対する尽力であり、時期と場所とがまゝまゝであるので現在では小田原北部の八〇才以上の古老位しか知つてゐない。 氏は弘化二年(一八四五年)小田原市蓮正寺(當時足柄下郡富水村)に生まれ生家は蓮正寺で一流の下ぐらゐの地主であつたが、生頗る公共心に富み、青年時代から村会議員、村長、議員等にあげられ、また足柄銀行(後に伊豆銀行に合併、現在静岡銀行小田原北支店)を創立し、当時西相で一流の政財界人として聞え、大正十一年(一九二二年)七八才で他界した。 この様に明治中后期から大正時代にかけて、足柄下郡(當時小田原は町で、下郡の一部)及び上郡では知られた人であつたが、右の様に政界や実業界で大活躍した功績以外に、酒匂川の堤防復旧工事に及した大功績は永久に忘れられない。大偉業であつた。

(2) 川口広蔵 水の無い荻窪に田地を開発した川口広蔵氏の大功績は、既に一応研究されてゐるから、その詳細な紹介は省略するが、建設技術の未発達であつた約二〇〇年前において、塔之沢からトンネルその他の難工事によつて、荻窪に水を引き、約二〇町歩の水田を開発したのは驚異的大偉業であつた。またこの水によつて荻窪ばかりでなく、湯本、山崎、入生田、風祭、水之尾にも六〇町歩の水田が増設されたことは余り知られてゐないが、当時最大の主要産業であつた米の増産に大に功献した殊に従来田地のなかつた荻窪に新に水田を開発したのは古今を通じて小田原の最大産業功労者の一人であつたことは、いうまでもない。 氏は寛延二年(一七四九年)山北に生れ、農業の傍ら酒造業を営んだが、生來頗る技術の才能に恵まれ、二〇年の長月日の間大苦心して、この大偉業を完成し、名士格に取り立てられ、天保十一年(一八四〇年)九才の高齡で他界した。

生地の蓮正寺は酒匂川の西部に位しているが、当時は堤防工事が竹の蛇カゴ本位の幼稚のものであったから、洪水の度毎に決潰することが多く、村民は非常に困った(大正の初め頃から堤防技術が発達して洪水による決壊が少くなった)

これに対して氏は、村長議員等の職に在る時と否とに關係なく、二〇台から晩年に至るまで五〇余年の間、洪水の度毎に熱心に奔走してその復旧促進は努めしかも単に富水村ばかりでなく、堤防に關係のある北部の桜井村、南部の二川村対岸の豊川村等の關係者のリーダーとなって陳情助成金、積の減免等に自費で奔走し、その功績は県下でよく知られ、藍綬褒賞を買った(當時日露戦後褒賞の授与が甚だ少かった)

氏は頗る特色のある性格の持主であった。頗る視野が広く、何事にも単に富水村ばかりでなく、附近の村々のことを考えていた。白山中学校の前身多古高等小学校は、当時芦子、二川、久野、富水の四ヶ村組合の西相における有名な大きな高等小学校であったが、こ

れは氏の創意によるものであり、附近の高等小学校のない岡本、桜井、大窪、早川各村の生徒も収容し、大いに感謝されていた。また日清戦後、わが国力進展、産業開発のために、政府が全国市町村に銀行の創立を勧告したので西相でも既設の小田原銀行の他に小田原通商銀行を始めとして、国府津、吉浜、桜井共益、金田興業、松田、川村等の銀行が創立されたが、これらは何れも各町村を単位としたものであった。

これに対して、氏は単に生地の富水村丈では規模が小さいと考へ、多古高等小学校の場合と同様に、芦子、二川、久野、富水の四ヶ村の有志と相談して、四ヶ村を中心とする足柄銀行を創立し、自ら頭取りとなり、大正一一年他界するまで約二〇年間在任したが営業の範囲が広いので、西相では右の小田原の二銀行に次ぐ有力なものであった。

明治四一年この芦子、二川、久野、富水の四ヶ村が合併して足柄村が出現したが、これは氏の永年の念願であり、主として氏の尽力によるものであった。氏は

当時村長でも議員でもなかったが、多古高等小学校や足柄銀行の場合と同様に、地方自治を発達するには大きな村の方が有利だと考へ日露戦後政府が町村合併を奨励したので好機として、四ヶ村に対して熱心に勧告し、遂に一旦に四ヶ村合併と云う大事業に成功したのであり、当時の足柄村は県内有数の大村であった。

また氏は当時としては珍らしく、家名とか資産相続とかに無頓着で、ある意味で新しい思想の持主であった。長男頭次氏は蓮正寺の小沢家(通称大名下、富水村の有名な豪家)に、次男彰吉氏は小田原の豪家松岡家へ養子に出し、晩年は三男三郎氏の経営する小沢病院院内の小宅に住んで生涯を終った。

この様に公共事業その他に専念したので殆ど家産を失い、晩年当時流行した救済無尽によって、僅かの不動産を残す丈となったが、一向に平気であった。

(一) 湯川猪之三郎  
井細田の街道から西方八幡神社を越え、久野川が点直に東西に流れており、誰しもこれは自然の流がれ

でなく、人工的に改修されたものであることに気付くであろう。また少し頭の働かぬ者は、久野の様な丘に挟まれた行き詰の土地に、政や県や市がこの様な大工事を施工することは減多に行なわれるものでなく、何かの機会に誰かが尽力して実現したものであろうと推測するであろう。事実この大

事業は関東大震災復興事業を好機として、湯川猪之三郎氏の異常な才腕と尽力とによって実現したものであった。

湯川氏は明治五年(一八七二年)小田原市成田(当時足柄下郡豊川村)に生れ久野坊所湯川家の養子となつた。湯川家は久野で二流の上位程度の地主であったが、公共心に富む氏は、村会議員(久野及び足柄村)久野区長(現在の自治連合会長)及び養蚕組合長等に推され大正一二年の関東大震災當時は久野区長であった。

頗る思慮周密で企画の才に恵まれた氏は、震災復興計画を利用して久野川大改修を思い立ったが、これは久野としては劃期的の救済発展に対する大事業であるが巨費を要するので容易に

実現出来る性質のものではなかった。併し氏は幾多の苦心と努力とによってとうとうこの大事業に成功し、久野開発の永久の大恩人として、一大偉績を残した。

当時の久野川は星山の東方から神山神社西部に向つて南部に突入し、更に北部に曲つてV字型に流れ、更に川端部落の西部から東方に川端部に流れると云う厄介の河川で、洪水の度毎にV字型の部分の堤防が決壊し川沿いの田地主や村では大いに困っていたが、どうもならなかった。

また新河川を造り上げたばかりでなく、将来を見越して川沿いに当時としては大過ぎると云われた二間市の道路を建設したのは、一大卓見であり、また川の両側に桜を植えたのも、氏の着想であった。

家業としては養蚕に熱心で、いろいろと研究し、永く組合長として同業者のために大いに尽くし、殊に共同作業場を設けて無駄を省いたのは、珍らしい計画と云われ、同業者から大に感謝された。

この様に永く公共事業に尽くしたので、財産の維持が

久野と久野の間に流れており、誰しもこれは自然の流がれ

でなく、人工的に改修されたものであることに気付くであろう。また少し頭の働かぬ者は、久野の様な丘に挟まれた行き詰の土地に、政や県や市がこの様な大工事を施工することは減多に行なわれるものでなく、何かの機会に誰かが尽力して実現したものであろうと推測するであろう。事実この大

事業は関東大震災復興事業を好機として、湯川猪之三郎氏の異常な才腕と尽力とによって実現したものであった。

湯川氏は明治五年(一八七二年)小田原市成田(当時足柄下郡豊川村)に生れ久野坊所湯川家の養子となつた。湯川家は久野で二流の上位程度の地主であったが、公共心に富む氏は、村会議員(久野及び足柄村)久野区長(現在の自治連合会長)及び養蚕組合長等に推され大正一二年の関東大震災當時は久野区長であった。

頗る思慮周密で企画の才に恵まれた氏は、震災復興計画を利用して久野川大改修を思い立ったが、これは久野としては劃期的の救済発展に対する大事業であるが巨費を要するので容易に

実現出来る性質のものではなかった。併し氏は幾多の苦心と努力とによってとうとうこの大事業に成功し、久野開発の永久の大恩人として、一大偉績を残した。

当時の久野川は星山の東方から神山神社西部に向つて南部に突入し、更に北部に曲つてV字型に流れ、更に川端部落の西部から東方に川端部に流れると云う厄介の河川で、洪水の度毎にV字型の部分の堤防が決壊し川沿いの田地主や村では大いに困っていたが、どうもならなかった。

また新河川を造り上げたばかりでなく、将来を見越して川沿いに当時としては大過ぎると云われた二間市の道路を建設したのは、一大卓見であり、また川の両側に桜を植えたのも、氏の着想であった。

家業としては養蚕に熱心で、いろいろと研究し、永く組合長として同業者のために大いに尽くし、殊に共同作業場を設けて無駄を省いたのは、珍らしい計画と云われ、同業者から大に感謝された。

この様に永く公共事業に尽くしたので、財産の維持が

困難となり、小沢氏と同様に救済無状によって家政を整理したが、村民や知人は氏の公共的事業の大功労者であることを知っていたので、喜んでこれに参加した。昭和十九年（一九四四年）七三才で他界した。

なお数年前元市議田中善太郎氏等の尽力により、星山の同川畔に、氏のこの大偉業に対する顕徳牌が建立された。

### 神奈川の歴史展

星野喜久雄

正月横浜有隣堂で催物として「神奈川の歴史展」があるということが朝日新聞神奈川版に広告が出ていたので早速五日の日に出かけた。桜木町の駅の先に「関内」という駅が出来ているのを知らず道草をしてしまいました。が久しぶりにみる伊勢崎町で入口の美好野で

食事をして有隣堂の前まで参りますと正面「ウインドウ」の中に趣旨書と共に大山神社からの出品物という長尺物の日本刀が出てゐるのに驚きました。長さ九尺もあろうか太さも五寸もある大物で見事でした。エレベーターで展示場へ参りましたが入口に木彫坐像が安置してあり何んと感違いしたのか鎌倉管領上杉氏の坐像と思つておりましたが

説明書で見ますと国宝国立博物館出品の「伝源頼朝像」でした。画像を見なれているせいか初めての木像で頼朝を見まぢがえるようでは私の歴史好きもあてにならない。郷土の誕生文化のあけぼの武士の世の中近代のはじまりと手ぎわよく展示をされておりましたが全体を通じての出品が「文化財」でなく文化財の「写真展」ということでした。

それでも立派な大きな写真ですで見こたえはあります。神奈川県の航空写真海上の名の国分寺跡は現在図の上に往年の霊塔が線引されており想像図が書かれ法隆寺を思い出しました。甘繩城といふことは小田原北条氏の関係で知りましたが現在の大船の所今度いってみて清泉女学校のあるところ生徒さんの作られた地形の模型が出品せられており

まして中央山の上の盆地の上の所に城跡があったというところで輪郭がつかめました。小田原関係では北条早雲、うしろの震災前の写真、二宮尊徳、天守閣箱根関係などの大写真が展示せられておりました。みやげに読売新聞横浜支局編の「神奈川の歴史」上中下三冊と横浜駅でシューマイを子どもに購入して正月の半日を思わず二時間楽しかったですことが出来ました。

小田原史談会と伊豆史談会とが一年交互に催す。其地方の史実を探索する史蹟めぐりの会が、二月十九日行なわれ同日昼拾二時半伊豆修善寺駅に集合しました。会員四十六名参加者総勢百余人は直ちに、鎌倉時代に皇山園清が坂きて廻れる修善寺城跡にとロープウエーに身を托して頂上し、更に鉄塔に登り、四方ひらけしを隅なく眺めまわし、眼下に桂川、狩野川、大見川を薄き春光に望見して、柏久保城のあたりを指し北条並に大開の戦国時代の攻略を偲び、それよりバスにて修善寺に詣り、宝物及び古文書を見聞し、大同二年（八〇七）弘法大師開山より宗

旨の変革、真言宗、臨濟宗を経て延徳之年（一四八九）北条早雲に依り再建せられ曹洞宗となれるとぞ、参禅の堂の新らしく整えるを見て、修善寺公園に至り、丘に登れば富士見の松とて雄大な稀に見る壮観に驚ろ

きの梅をおしみつゝ、岡本綺堂の修善寺物語の頼家夜叉王の悲話の「佳詞絶調」の碑に一抹の悲哀を残し、暮色せまらんとして一路今宵の宿舎虎溪橋畔の橋本屋旅館に這入りました。

滝氏の「修善寺城をめぐる激戦と其遺因」の講演がありました。

豆相史談会本年度役員左に

会長 山口 栄  
顧問 戸羽山 滝  
副会長 立木 望隆  
井上 英一

遠藤安太郎  
伊東 木村 博  
三島 太田政太郎  
監査 修善寺 鈴木 茂  
翌二十日は明治十二年発見されたと云う頼朝の祠の遺蹟に足を運び、赤蛙の河原に一同記念撮影して、川向うの裏道を辿り頼家の墓

立木望隆・岸達志・下田芳太郎・杉崎米蔵・相沢栄一・内田武雄・小林泰助・杉崎正五・川口潤一郎・橋本庄平・香川知雄・市川謙・清水専吉郎・外に松野光純事務員が日帰りで参加し人員の世話をしました。

散会後有志にて修善寺在大平の里の幻庵屋敷跡を訪い、その向いの丘なる小平にある幻庵菩提寺なる宝珠山金雷寺に詣り、すばらしく大きい山茶花の木が門脇に三本見事に辺鄙にこそ残るや年代に立つて思ひました。庭の池の幻庵屋敷の池庭に似通っていました。中宿、下宿などの地名にも小田原探求に通ずるよう史実の深探のおもしろさを覚えま

## 豆相史談会見学記

史談会副会長

清水専吉郎

き、傍の夏目漱石の碑文 仰臥人如啞黙然看大空 大空雲不動終日香相同 参加者交互に読みかわし 「則天玄私」の言にその人格を語りあげました。

転じて道をへだて、向う山の梅林に、今年はいづこも遅れましたがこゝ二分咲

開き、各会の四十一年度の事業項目と概況を。

修善寺町 安達庄市  
三島市 有田耕三  
小田原市 清水専吉郎  
沼津市 近藤光一  
久野 立木望隆  
各々報告あり、本年度の役員決定が終つて戸羽山

理事 修善寺 三倉 馨昌  
大仁 渡辺 敏夫  
足柄 加藤 誠夫  
三島 有田 耕三  
小田原 内田 武雄  
沼上 城山 正五  
内田 武雄  
杉崎 正五  
橋本 正平  
岸 達志  
北条 時雄  
木村 醒泉  
関野 惣平

「元久元年甲子七月十八日 征夷大將軍左源頼家尊靈元祿十六年建立」とあり、政子の奉納せる指月堂宇を見頼家の家臣十三士の墓を過ぎて、菊屋旅館に夏目漱石の滞在せる部屋を目のあたり偲び、桂川中州にある独館の湯の辺に至り、虎溪橋にて、催しを解散しました。

小田原の史談会員参加者

四二・二・廿一・記